

犯罪・非行に至る発達障害児等に対する予防・更生への 地域連携支援システムの開発

三浦光哉¹ 大村一史² 大江啓賢²

(1 山形大学大学院教育実践研究科 2 山形大学地域教育文化学部)

<要 旨>

本研究では、山形県において十分に整っていない非行・犯罪に至る発達障害児等を予防・更生するための地域連携支援システムを開発することを目的とする。

研究方法は、「非行・犯罪を救う支援委員会」を組織する、その組織に配置されている特別支援教育専門家チームが学校及び家庭に巡回支援する、教員に対して専門研修を実施する、対象児に「個別の支援計画」を作成する、非行・犯罪行為を制御改善する「認知コントロール能力改善プログラム」を開発して対象児に実施する、ことにした。

その結果、山形県内に教育・福祉・医療・保健・警察・法務などの関係機関で構成する「非行・犯罪を救う支援委員会」を組織することができ、その中の特別支援教育専門家チームが各学校や家庭に巡回支援する体制が整った。そして、教員等に非行・犯罪やいじめに関連する内容を含んだ特別支援教育研修を実施（30時間）するとともに、軽犯罪（万引き）をした3名の対象児に対して「個別の支援計画」を作成して再発防止に努めた。一方、非行・犯罪行為を制御改善する「認知コントロール能力改善プログラム」をコンピュータソフトで開発し1名に適用した。このように、山形県内に非行・犯罪の予防についての地域連携支援システムを構築することができた。

<キーワード> 非行、犯罪、発達障害児、特別支援教育システム

【はじめに】

2013年の厚生労働省及び文部科学省の統計によると、発達障害児約70万人、不登校児約22万人、被いじめ児約2万人、若者フリーター約201万人、ニート者約64万、少年事件者約28万人、特別法犯者約1万5千人、自殺者約800人など、子供を取り巻く学校・家庭・社会環境は非常に厳しく喫緊の課題となっている。この中でも、非行・犯罪に関する問題は、幼児期からの家庭環境の問題（貧困、片親、養育放棄、虐待・ネグレクト等）や発達障害の様相とも関連し、地域における早期の支援体制の在り

方も指摘されている。それゆえ、これらの課題解決には、抜本的な見直しが迫られている。

これに関連する対応として筆者らは、「特別支援教育コーディネーターの質保証と新支援システムの構築」（2007）、「小1プロブレムを防止する幼児期からの移行支援プログラムの開発」（2013）の研究実践により、山形県内に教育・医療・保健・福祉・労働等の関係機関による「特別支援教育推進委員会」「特別支援教育専門家チーム」を組織して、保育所・幼稚園、小学校、中学校を対象とした巡回相談、障害有無のスク

リーニング、個別の支援計画の作成、教員への特別支援教育研修制度、担任への指導助言などを確立してきた。そして、不登校数の劇的減少、いじめ発生件数の抑制、学力向上などの波及効果を示してきた（三浦 2007,2013,2015）。

しかし、これらの研究は、小中学校の発達障害児と特別ニーズ児（不登校、引きこもり、被いじめ、学力不振、虐待・ネグレクト等）を対象としたものであり、さらに困難となっている非行・犯罪に至る児童生徒や青年までを対象としているものではなかった。このように非行・犯罪行為に至る児童生徒の支援は、関係機関の連携の下に「未然防止」と「更生」という2つの側面があり支援体制整備が重要と考える。対して支援体制の不備は、一般の児童生徒にも多大な影響を及ぼすばかりでなく、学校卒業後においても再犯し、社会的な課題ともなっている。そのためにも、地域での児童期から卒業後に至る長期的・連続的な連携支援システムの開発が必要不可欠である。

そこで、山形県において非行・犯罪に至る発達障害児等を予防・更生するための地域連携支援システムを開発することを研究目的とする。

【方法】

1. 具体的内容

地域連携支援システムを開発するために、以下の5つの具体的内容を設定する。

①地域の中に大学・教育委員会・子ども支援課・福祉事務所・児童相談所・少年鑑別所・少年院・家庭裁判所、警察などで構成する「非行・犯罪を救う支援委員会」を設置する。

②特別支援教育専門家チームが定期的に学校及び家庭に巡回支援をする。

③教員や関係機関の職員に対する専門研修プログラムを開発し実施する。

④対象児に対して「個別の支援計画」を策定して課題解決する

⑤脳科学を活用した「認知コントロール能力改善プログラム」を開発し適用する。

2. 倫理的配慮

研究において実施する非行・犯罪に至った発達障害児等への予防・更生のための脳科学的制御課題については、山形大学地域教育文化学部倫理委員会の審査を受け、本人・保護者及び関係機関（児童相談所・少年鑑別所等）の承認がなされた後で開始する。その際には、事前に十分な説明を行い、同意（インフォームドコンセント）が得られた場合に実施する。なお、個人情報、高いセキュリティ技術を駆使して管理する。

【実践経過と結果】

1. 「非行・犯罪を救う支援委員会」の組織と設置

図1には、山形県内における教育・福祉・医療・保健・警察・法務などの関係機関で構成する「非行・犯罪を救う支援委員会」の組織を示した。この組織は、山形大学特別支援教育臨床科学研究所を中核として、市町村教育委員会、市町村子ども支援課、山形県警察、山形県児童相談所、山形少年鑑別所、山形法務少年支援センター、山形児童自立支援施設、山形家庭裁判所、山形県内小学校・中学校・高等学校で構成されている。これにより、学校や家庭で非行・犯罪等による行為が発覚した際には、早期からの支援体制が整い、各関係機関が連携しながら教育相談や適切な対応ができることとなった。

非行・犯罪に至る発達障害児等を予防・更正する 地域連携支援システムの開発

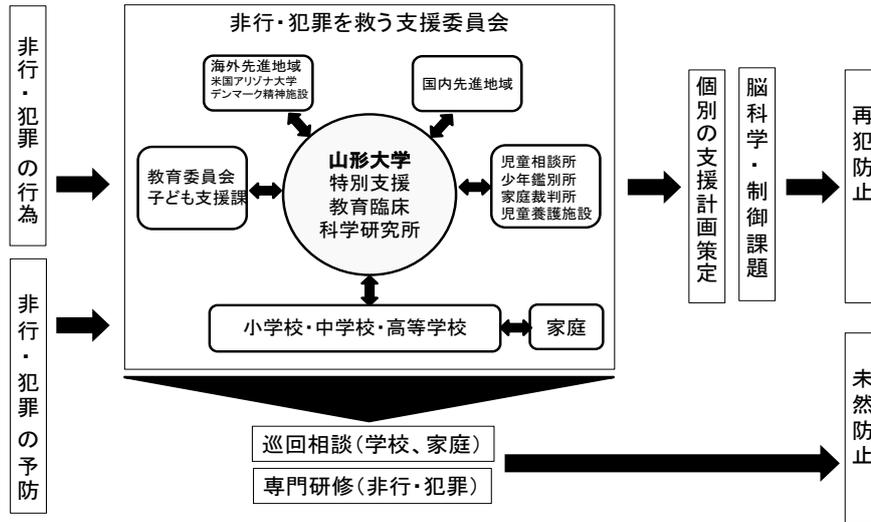


図1 「非行・犯罪を救う支援委員会」の組織と様子

2. 特別支援教育専門家チームの学校及び家庭への巡回支援

山形県内市町村教育委員会では、既に教育・医療・福祉・保健・労働の関係機関の代表約20名で構成する「特別支援教育推進委員会」を設置し、その中に大学教授、教育委員会指導主事、教育相談員、個別検査員、保健師、福祉課担当者等で構成する「特別支援教育専門家チーム」を配置している。この特別支援教育専門家チームを「非行・犯罪を救う支援委員会」の中に組み入れることにした。

特別支援教育専門家チームは、各学校に向いて発達障害等の有無を見極めるためのスクリーニングや個別検査の実施、非行・犯罪の確認、担任への相談支援を行った。また、保護者の要請により、家庭訪問も実施して今後の対応を話し合った。

3. 教員等への専門研修プログラムの考案と実施

山形県内市町村教育委員会では、既に7～10年前から担任や学習支援員等に対して「特別支援教育研修講座（初級30時間、中級30時間）」を実施している。この講座内容は、「特別支援教育の基礎理解」「発達障害児等の理解と支援」「個別の支援計画の作成」「アセスメントと個別検査」「医療と福祉」、「チーム支援とコンサルテーション」「保護者と障害理解と支援」「卒業後の進路支援」の8分野で構成されており計30講座がある。その講座の中には、本研究の非行・犯罪に関連する内容が含まれている。例えば、初級講座に「いじめの予防と対応」「チーム支援とケース会議」「保護者との連携と障害の伝え方」「個別の支援計画の内容と作成」。中級講座に「いじめ被害への具体的対応」「チームで考える戦略的支援」、「地域資源の把握と関係機関との連携」「障害に応じた個別計画の支援計画の作成」などである。表1には、天童市で実施されている特別支援教育研修会の講座内容を示した。講

師は、「非行・犯罪を救う支援委員会」の委員でもある山形大学教授、山形県内教育委員会指導主事、医師、福祉課職員なども担当した。

さらに、天童市では、小学校や中学校の生徒指導担当者に対しては、この講座と別に非行・犯罪の研修会を企画し実施した。講師には山形少年鑑別所所長を招聘し、題目は「いじめと非行 ～非行臨床の立場から～」であった。この研修会終了後には、防犯対策委員、警察官、民生委員も加わって、中学校区で連携会議を開催した。

4. 対象児に対する「個別の支援計画」の作成

障害のある児童生徒に対して各学校では、個別の支援計画（個別の教育支援計画、個別の指導計画）を作成している。非行・犯罪をしてしまった発達障害児には、その支援計画に指導目標を追加し、それに対する指導内容・指導方法、関係機関との連携を記載して対応した。本研究中に個別の支援計画を作成した児童生徒は3名であった。いずれも万引きであった。「盗癖を防止する見通しボード」の教材を開発して指導にあたった。

5. 非行・犯罪行為を制御改善する「認知コントロール能力改善プログラム」の開発

非行・犯罪行為を制御改善するための一つの手段として、「認知コントロール能力改善プログラム」をコンピュータソフトで開発した。そして、1名に適用した。

人間の実行機能は、課題目標の達成や、社会的文脈における適応的な行動を遂行するために認知面での制御を行っている。実行機能研

究において、広く用いられているのが、Miyakeら（2000）のモデルである。このモデルは、実行機能を3つの要素から構成している。活動に関連する認知的な情報を適切に切り替え、遂行すべき行動や課題を円滑に切り替える能力である「シフティング」や、保持している認知的な情報を適切に処理したり、操作したりする能力である「アップデートイング」、活動に無関係なことや、衝動的な行動を抑える能力である「抑制」がある。これら3つの構成要素を適切にトレーニング、評価することで、社会的文脈に沿った行動を行うことができたり、活動を円滑に遂行したりすることが可能となると考えた。この実行機能を適切にトレーニングし、非行・犯罪行為を制御改善するために開発したのが、「認知コントロール能力改善プログラム」である。このプログラムには、5つの課題があるので以下に紹介する。

表 1 特別支援教育研修会「講座内容」(天童市：2017年)(網掛けの部分が非行・犯罪の関連講座)

期日	初級講座			中級講座		
	時間		講師	時間		講師
5/16 (火)	13:45 ～ 13:55	開講式		13:45 ～ 13:55	開講式	
	14:00 ～ 14:50	検査の意味と障害判断	三浦光哉	14:00 ～ 14:50	スーパーコーディネーターの目的と役割	三浦光哉
	15:00 ～ 15:50	コーディネーターの目的と役割	清野千絵	15:00 ～ 15:50	発達障害児への具体的指導方法	三浦光哉
	16:00 ～ 16:50	チーム支援とケース会議	佐藤 和	16:00 ～ 16:50		
6/15 (水)	13:00 ～ 13:55	特別支援教育とインクルーシブ教育	三浦光哉	13:00 ～ 13:55	肢体不自由児・病弱児の理解と支援	大江啓賢
	14:00 ～ 14:50	実態把握のための検査 保護者との連携と障害の伝え方	三浦光哉	14:00 ～ 14:50	保護者の障害理解のための具体的な対応	三浦光哉
	15:00 ～ 15:50	保護者との連携と障害の伝え方	三浦光哉	15:00 ～ 15:50	発達障害児への具体的な支援方法	三浦光哉
	16:00 ～ 16:50	ASDの理解と支援	吉原課長	16:00 ～ 16:50		
7/8 (水)	15:00 ～ 15:50	個別の支援計画の内容と作成	荒井指導主事	15:00 ～ 15:50	ケア不登校の予防と対応	荒井指導主事
	16:00 ～ 16:50	医学的知識と医療機関との連携	秋葉大輔	16:00 ～ 16:50	医学的知識と医療的	秋葉大輔
8/4 (木)	13:00 ～ 13:55	KABC-IIの概要と体験	三浦光哉	13:00 ～ 13:55	弱視児・難聴児の理解と支援	長崎郁夫
	14:00 ～ 14:50	WISC-IVの概要と体験	三浦光哉	14:00 ～ 14:50	特別支援教育の最新事情	大村一史
	15:00 ～ 15:50	LDの理解と支援①	清野千絵	15:00 ～ 15:50	障害に応じた個別計画の支援計画の作成	三浦光哉
	16:00 ～ 16:50	Q-Uの解釈と学級経営	笹原英子	16:00 ～ 16:50	発達障害児への具体的な支援	三浦光哉
10/3 (月)	14:00 ～ 14:50	不登校の予防と対応	三浦光哉	14:00 ～ 14:50	チームで考える戦略的な支援	相澤泰子
	15:00 ～ 15:50	ソーシャルスキル活動と支援	榎 育男	15:00 ～ 15:50	福祉的ケアと自立支援	福祉課担当職員
	16:00 ～ 16:50	ADHDの理解と支援	佐藤亮子	16:00 ～ 16:50	発達障害児への具体的な支援方法	三浦光哉
10/17 (月)	15:00 ～ 15:50	いじめの予防と対応	村山教育事務所	15:00 ～ 15:50	いじめ被害への具体的対応	村山教育事務所
	16:00 ～ 16:50	福祉的知識と医療機関との連携	金子 健	16:00 ～ 16:50	検査報告書の解釈と具体的な対応	三浦光哉
11/21 (月)	14:00 ～ 14:50	空間認知障害の理解と支援	土肥 修	14:00 ～ 14:50	個別支援計画の評価と活用	三浦光哉
	15:00 ～ 15:50	進学先の情報と進路選択	門脇道子	15:00 ～ 15:50	地域資源の把握と関係機関との連携	福祉センター
	16:00 ～ 16:50	LDの理解と支援②	清野千枝	16:00 ～ 16:50	発達障害児への具体的な支援	三浦光哉
1/26 (水)	14:50 ～ 15:40	個別支援計画の検討	三浦光哉	14:40 ～ 15:40	進路支援と進学先の状況	特別支援学校教員
	15:50 ～ 16:40	評価と活用	三浦光哉	15:50 ～ 16:40	実践のまとめと評価	三浦光哉
	16:45 ～ 17:00	閉講式		16:45 ～ 17:00	閉講式	

表2 対象児に対する個別の支援計画 (学校や人は仮名)

<個別の教育支援計画>

学校名：東北市立楽天小学校

氏名	山形 一郎	性別	男	生年月日	平成16年7月7日	期間	平成28年4月～平成29年3月
診断・判断名	・自閉症スペクトラム障害 (平成23年9月10日、青葉市立病院、鈴木有香Dr)、服薬：なし						
検査・成績等	・教研式NRT (ISS=0、国語=51、算数=52 平成28年5月19日) ・KABC-II (認知総合尺具105、習得総合尺度110、平成28年9月3日、教育相談員：川越小百合)						
合理的配慮 (合意形成)	・パニックが激しくなったときには、別室に移して精神安定させる。(教務主任対応) ・ASD特有の感覚過敏 (暑がり) があり、扇風機等を教室に設置する。(休み時間は保健室でエアコン)						
長期目標 (29年3月) (卒業年度)	本人・保護者	・友達と積極的に関わってほしい。 ・友達とのトラブルを少なくしてほしい。					
	学 校	・友達の意見を聞き入れて、友達とのトラブルを少なくすることができる。 ・場面切り替えができ、行動がスムーズにできる。					
関係機関	時 期	関係者の役割と具体的な支援					
学 校	毎日	○担任 (玉城宏之) ・問題行動を少なくするように、行動療法 (賞罰) を使用して減少させていく。 ○特別支援教育コーディネーター (竹田信人教諭)					
	随時	・保護者の精神的なケアをしていく。 ○養護教諭 (阿部理彩)					
	1か月毎	・副作用の観点から体重測定し、減少している場合には主治医に連絡をする。					
家 庭	年3回	○母親 (山形花子) ・授業参観をして、本人の様子を観察する。					
	2か月毎	・定期的に通院して、行動の様子を観察していく。					
医 療	3か月毎 適宜	○青葉病院 (鈴木有香Dr) ・経過観察をしながら、安定しない場合には、薬物療法の使用を検討する。 ・保護者に対して家庭でのパニック等の対処をアドバイスする。					
福 祉	適宜	○児童相談所 (寫田誠一所長) ・生徒指導上の問題 (万引き等) の行動が頻繁な場合には、面接をする。					
専門家チーム 教育委員会	年1回程度	○特別支援教育専門家チーム (三浦光三東北市大教授、石澤明夫指導主事) ・授業参観をして、行動の様子を観察していく。。。					
	毎年10月	○東北市教育委員会教育相談員 (川越小百合) ・個別検査 (WISC-IV) を実施して、さらに詳しく分析する。					
	毎月	○東北市立大学教育学部特別支援教育研究室 (大村和史教授) ・「認知コントロール能力改善プログラム」を実施して、犯罪等の行為を制御する。					

<個別の指導計画>

学年学級	6年1組 (通常学級)	担任名	玉城 宏之	期間	平成28年4月 ～平成29年3月 (1年間)
氏名 (性)	山形 一郎	指導者		評 価	
教科・領域等	目 標	指導者	指 導 方 法	評 価	
学 校 生 活 全 般	○対人関係	担任	・個別指導などで、「声がけ」のソーシャルスキルトレーニングを行っていく。 ・本人の意見を振り返り、それが正答であるかを考えさせる。	・10月以降は、週1回に抑えられた。 →◎目標達成 ・1月以降、痾癩をおこすことがなくなった。 →◎目標達成	
	○コミュニケーション	担任	・自分から話ができない場合には、担任との間で、支援のブロックサインを取り決めておく。 ・自分の意見は、最初に話すことを心がけるようにアドバイスする。	・グループ学習では、正確に話しが伝わらないことがあった。 (▲目標達成せず→次年度も継続) ・グループ学習では、友達から意見の違いを指摘されることが多かった。 (▲目標達成せず→次年度も継続)	
	○問題行動の制御		・認知コントロール能力改善プログラムの実施により、問題行動を制御していく。	・2月以降は、1回の問題行動 (万引き) をしていない。 →◎目標達成	

(1)シフティングを測定する課題

(Number Letter 課題)

図 2 には、Number Letter 課題を示した。課題の流れは、まず画面中央に注視点「+」が 1 秒間提示される。その後、画面を 4 分割した枠の中のいずれかに、数字と文字を組み合わせた刺激(あ 4、イ 3 など)が提示される。対象者は、刺激が上段に提示された場合は文字をひらがな、もしくはカタカナに分類し、下段に提示された場合は数字を偶数か奇数に分類することが求められる。この課題では反応時間と正答率を分析対象としており、シフティングの能力が優れているほど、円滑な切替を行うことができ、反応時間が早く、正答率が高くなる。

(2)シフティングを測定する課題

(Color shape 課題)

図 3 には、Color shape 課題を示した。課題の流れは、まず、画面中央に注視点「+」が 1 秒間提示される。その後、先行刺激(先に画面に提示される刺激)として、画面に「形」もしくは「色」の文字が提示される。この先行刺激の提示時間は課題の難易度によって設定されている。先行刺激が提示された直後に、先行刺激の下に標的刺激(反応が求められる刺激)として緑もしくは赤色の三角形か円が提示される。対象者は、先行刺激が「形」と提示された場合はその図形の形を、先行刺激が「色」と提示された場合はその図形の色を答えるように求められる。この課題では、反応時間と正答率を分析対象としており、シフティングの能力が優れているほど、円滑な切替を行うことができ、反応時間が早く、正答率

が高くなる。

(3)シフティング(切替)の機能を測定する課題 (Category switch 課題)

図 4 には、Category switch 課題を示した。課題の流れは、まず画面中央に注視点「+」が提示される。その後、先行刺激として画面上に「+」「♥」が提示される。先行刺激が提示された直後に、標的刺激として、16 種類の名詞のいずれか 1 つが提示される。使用された標的刺激は「ぞう」、「うし」、「くま」、「きりん」、「ねずみ」、「りす」、「すずめ」、「めだか」、「くるま」、「つくえ」、「こくばん」、「いえ」、「こめ」、「くつ」、「えんぴつ」、「てぶくろ」である。先行刺激が「+」の場合は、標的刺激の実際の大きさが、サッカーボールよりも大きい小さいかで分類し、先行刺激が「♥」の場合は動物か非動物かを手元のボタンを使用して分類する。本課題の分析では、反応時間及び正答率を対象としている。反応時間が速く、正答率が高ければ、その対象者の有するシフティングの能力は高いことが期待される。

(4)抑制を測定する課題

(Antisaccade 課題)

図 5 には、(Antisaccade 課題)を示した。課題の流れは、まず、画面中央に注視点「+」が提示される。その後、先行刺激として注視点の左右いずれかに黒い四角(■)が提示される。その直後に先行刺激と反対側に瞬間的に標的刺激(反応すべき刺激)として、矢印が提示され、すぐに灰色の四角で隠される。このときに対象者は提示された矢印と同じ向き

の十字ボタンを押すことを求められる。なお、矢印の提示時間は難易度によって変動する。本課題の分析では、反応時間及び正答率を対象としている。抑制の能力が高いほど、適切に反応抑制し、正確に課題に取り組むことができると考えられる。

(5) 抑制を測定する課題 (Stroop 課題)

図 6 には、Stroop 課題を示した。課題の流れはまず画面中央に注視点「+」が 1 秒間提示される。その後、画面に赤、青、黄色、緑色のいずれかの色で着色された「あか」「あお」「きいろ」「みどり」の文字が 1 つ提示される。対象者は文字の色と同じ色のボタンを押して反応することが求められる。抑制の能力が高く、衝動的に反応することを適切に抑制することができる場合は、この課題における正答率は高くなることが考えられる。

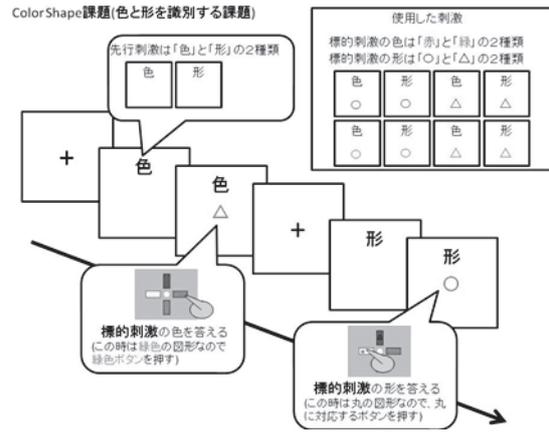


図 3 Color shape 課題

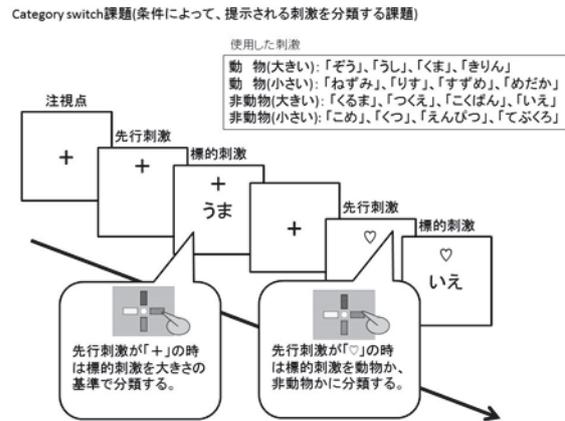


図 4 Category switch 課題

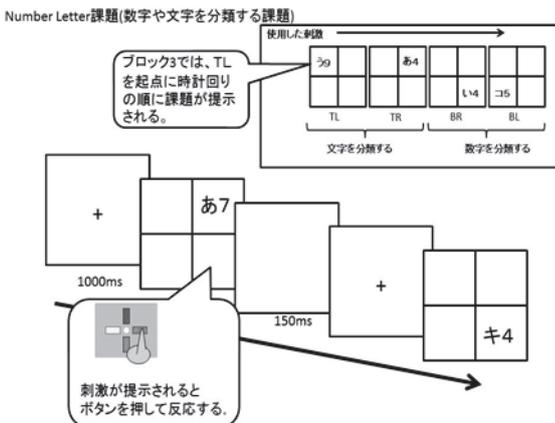


図 2 Number Letter 課題)

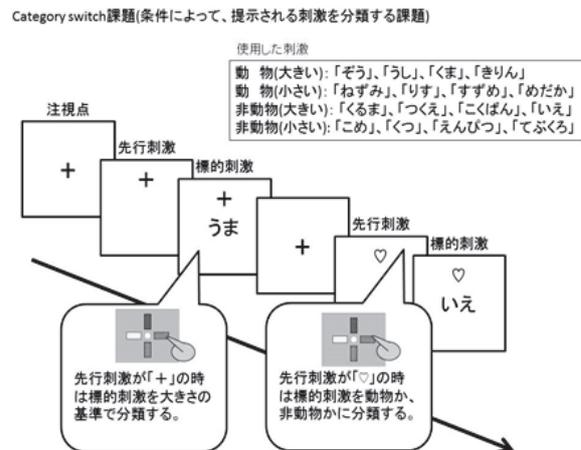


図 5 Antisaccade 課題

Stroop課題(文字の色を答える課題)

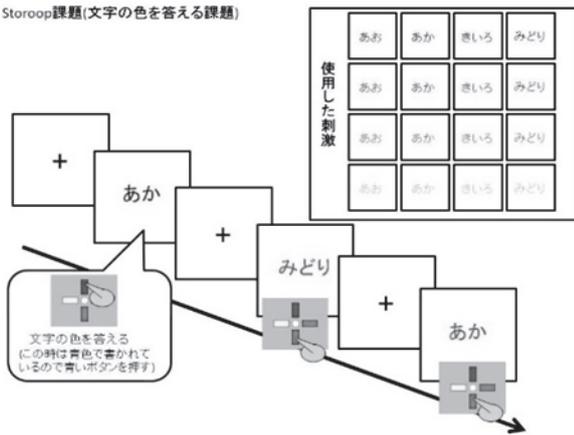


図6 Stroop課題

【おわりに】

本研究は、山形県において未だ整備が整っていない非行・犯罪に至る発達障害児等を予防・更生するために、地域連携支援システムを開発することである。本研究により、山形県内に「非行・犯罪を救う支援委員会」を組織し、この地域連携支援システムを活用して、非行・犯罪の早期発見に努め、早期対応していくことができるようになった。

今後は、本研究で開発した。非行・犯罪行為を制御改善する「認知コントロール能力改善プログラム」をさらに精度の高いものにして実績を積んで社会還元したい。

【文献】

三浦光哉・大村一史・大江啓賢(2009)：大学と自治体の協働による発達障害児の早期予防・早期改善」, 日本教育大学協会年報, 第29集, 70-80.

三浦光哉編 (2013)：小1プロブレムを防ぐ保育活動(理論編)(実践編), クリエイツかもがわ.

三浦光哉 (2015)：小1プロブレムを防ぐ保育活動プログラムの開発・適用と効果, 宮城教育大学特別支援教育総合研究センター研究紀要, 第10号, 1-10.

三浦光哉(2015)：小1プロブレム中1ギャップの要因とスムーズな移行, 実践障害児教育, No501, 10-17 学研.

Miyake, A., Friedman, N. P., Emerson, M. J., Witzki, A. H., Howerter, A., & Wager, T. D. (2000).
The unity and diversity of executive functions and their contributions to complex "Frontal Lobe" tasks: a latent variable analysis.
Cognitive Psychol, 41(1), 49 -100.
Doi:10.1006/Cogp.1999.0734